



# おーぷん



社会福祉法人さざんか会法人広報誌『おーぷん第 88 号 2022 冬』

発行：さざんか会本部/船橋市行田 2-8-1/☎047-404-1135

編集：おーぷん編集委員会/けいよう/船橋市二和西 5-10-1/☎047-411-8177

「明けまして、おめでと〜ござい  
ます」。ご挨拶をしながらも、  
このところ“コロナ、コロナ”  
で年は暮れ、“コロナ、コロナ”  
で新年が明ける厳しい現実があ  
ります。  
この国で、初めて新型コロナウイルス  
ウィルス感染症発症が明らかにな  
ったのが、一昨年1月でしたか。  
中国武漢から帰国した人の肺炎  
症状からの検査により明らかに  
なったようです。

それから2年が過ぎて、この間  
の世界的大流行は多くの死者を  
見てしまいました。感染予防の  
ワクチンの開発と接種が待望さ  
れ、わが国でも接種が進み、多く



の人たちが2回目の接種を終え、  
その甲斐もあったか新規感染者  
は激減し、やっと一息と思っ  
たものの、しぶといウィルスは変  
身を得意とするもので、またま  
た新たな“オミクロン株”なる  
ウィルスとなって私たちに脅威  
を与えています。  
このところ、2回接種を終え  
た人も感染しているものであり、  
全く油断できない状況です。継  
続して感染防止策を施し、利用

## 『新年は50年目』 社会福祉法人さざんか会 理事長 宮代 隆治

### おーぷん88号目次

P1 「新年は50年目」  
さざんか会 理事長 宮代隆治

P3 北総の里だより  
・北総育成園  
・笹川なすな工房

P6 各事業所冬だより  
・のまる  
・ゆたか福祉苑  
・けいよう  
・カメラアハウス  
・グループホーム  
・とらのこキッズ  
・さざんかキッズ

P10 「入所施設を  
転換した事例」  
さざんか会 本部 泉 一成



者及びご家族各位、そして職員各位の健やかな日々を期するばかりです。



さて、今回表題に記しましたように今年「さざんか会」が誕生して50年という節目の年となります。この法人を生み出した「船橋市手をつなぐ育成会」が誕生したのは、更に遡り68年前の事になります。

本来ならば、この50年の歩みを振り返ると共に未来に向けて志を新たに整えるためにも、記念のイベントを設けることも考えられますが、この「コロナ禍」においてはそれもままなりません。大勢の人が、一堂に会することは極力避けることが常識となっています。

50年という節目の年を目前に、為す術無しか…。そこで、一つだけやっておかねばならない事を考えました。それは「記録」で

す。この50年の中で、法人として何を為して来たのか。例えば、施設をつくりました。何故、どういふ思いで施設がつくられたのか。そして、その効果は如何なるものであったのか。正確な記録を残すことが必要と判断の次第です。



50年前、精神薄弱児通園施設(当時のママ)を設立、この事業開始と共に始まった法人活動。現在、8施設を運営しご利用頂く障害のある人たちも約500名を数え、50年間にその物理的規模は拡大し、運営の様相も変わりました。時代を追って皆さんのニーズを汲み上げ、事業展開を図って来たのですが、ここまで規模が拡大することは当初から意図したものではありません。物理的規模の拡大をもって、発展とか成長という表現を安直に用いることに懸念を覚えます。問題は中身であり、障害当事者による評価です。いかに施設の

数が増えて、そこで提供される各種サービスを利用する人たちも大勢で、職員集団も大人数。サービスのメニューも豊富、色んなニーズへの対応も不自由なく十分に。頼りになる法人であり、施設であり…。それでも、利用する障害当事者に私たちに対する不平等や不満があったり、思いが届いていないとしたらどうでしょうか。

事業体として、法人存在の意味とあるべき姿、そして向かうべき目標としての「理念」は不可欠です。法人格を取得して本格的に障害福祉事業を手掛けて50年ですが、初めの一步は義務とされた学校教育から外され、疎外された子供たち。その理不尽に悲しみ憤るばかりでなく、親として当然に吾が子の幸せを願い、その実現に立ち上がり運動を始めた親たちの思いは、心に刻んでおきたいと思えます。

私事にて恐縮ですが、私がこの法人に入職して49年目を迎えました。法人誕生の翌年に採用されたことになりました。私の入職時には育成会を立ち上げ、運動を始められた親御さんたちが大勢いらっしやいました。折に

触れ、当時のお話を伺う機会がありました。皆で手をつなぎ、声掛け合って子ども達にとって良かれと思われるなら、何でも積極的に取り組んで来られました。その熱い思いに、圧倒されたものですし、とても多くのことを学ばせて頂きました。そして、初めの一步から今日に到る68年、及びさざんか会としての50年、面々と続いた私たちの営み、そのエネルギーの源泉は何であったのかを考えています。

この国に限らず、障害のある人が世の中で蔑まれ、邪魔者扱いされ、存在そのものを軽んじられることがあります。それは、決して過去形ではないことを、私たちは知っています。障害の有無に関係なく、人は人として尊重されなければなりません。人としての価値に優劣や上下はありません。そんな社会の実現に少しでも近づく「新年」となりますよう、そのための一步を今日から踏み出すばかりです。



# 北総の里だより

## 北総育成園

### 『一笑千山青』

副園長 白樫 久子

北総の職員室からは、大きな椎の木と須賀山城址の森と、東庄の街並み、遠くに青々と大利根の流れが見える。

朝の9時、夜勤明けの職員2名から利用者の体調や様子の報告。日直と主任、師岡看護師がその報告を受けながら情報を整理する。「〇〇さんは夜中3回トイレに起きてきて少し眠りが浅いようです」「△△さんはおやつをよく食べたせいか、夕食は6割ほどでした」「□□さんは今日はバナナを自分で剥いて食べてくれました」。食事や睡眠の情報は、この人達により良い支援をするためにとても重要だ。

「●●さんは男子職員2名介助でトイレに行き、時間をかけて排尿がありました」「▲▲さんは、6日ぶりによい便が出ました。すっきりしたようです。」夜勤で疲れているはずの職員が、無事排泄できた利用者さんの様子をまるで自分のことのように笑顔で報告してくれる。高齢になつてきて排泄に難が出てきた人も増えた。良い排泄は良い生活につながる。職員は、その大切さをこの人達のそばに居るからこそ知っている。尿や便の形状や匂いや量を知ることがこの人達の心身の健康につながる。毎

日の暮らしの中の一、番具体的支援である。

冬場になって、乾燥肌やしもやけの報告も増えた。早めに発見しその人に合った適切な処置をすること。小さな変化に気づくには毎日一人ひとりときちんと向き合っていること。日常を知るからこそ非常を知ることが出来る。小さな傷やささいな肌荒れを丁寧に入手する。この人達は、「痛い」や「痒い」等の不調を適切に伝えることが難しい。そばに居る職員の気づきが大切だ。その気づきを全職員が共有して、統一した対応をすること。師岡看護師は個々の実情と過去の情報を整理しながら、支援職員に適切なアドバイスをしてくれる。それを受けて、支援職員もその気づきや観察力や対応力を向上させている。

き介助、洗濯物たたみ等その一つ一つが、利用者さんの生活と人権を守り、ご家族の安心につながり、そして、障害者施設運営の向上の一翼を担っているはずだ（少し大げさかもしれないが）。目の前のことをただこなすだけでなく、その業務の意義や相手の気持ちや次に業務につく人の感じ方を想像すると、自分の意欲やモチベーションはもっと前向きに変化し、成長していく。

9月から毎月職員研修を行ってきた。このコロナ禍で外部研修や施設見学もない。閉塞感を感じる日々。オンラインを利用して、前向きな研修の場を想定し、宮代理事長に「北総育成園の設立と期待される職員像」という講義をオンラインでお願いした。どのように皆さんか会は設立されたのか。北総育成園の原点は、ちちははの涙と我が子

への深い愛情である。北総職員50名全員が理事長の理念を勉強させていただいた。武井園長からは、昭和49年開所当時の若かった利用者と保護者の笑顔、働くこと生きることの48年について。写真や文章で北総の歴史を記録し続けてくれた園長だからこそ心に響く講義であった。源流を忘れずこれから面白い仕事をしたいこうと職員が深く学んでくれた。有難うございました。

コロナ禍も2年を超えた。外泊や外出のない2回目のお正月。年末年始、健康管理と感染防止を第一にしながらクリスマスイベントやカラオケなども企画した。食欲が落ちていた8歳のTさんがケーキを全部食べてくれたと嬉しい報告。久しぶりに面会に来てくれた兄に手を叩いて喜ぶHさん。そして入院生活が3か月を過ぎた身寄りのないKさんから「みんなにあいたい」と手紙が届いた。入所施設の悲喜こもごも。そして私達は前を向いて歩いていく。手を取り合って生きていく。そこには、笑顔がある。人を思いやる想像力がある。

「一笑千山青」いっしょうればせんさんあおし。どんな困難に直面しても、心配事が山ほどあっても、笑えば目の前の景色が青々と蘇る。新しい道が見えてくる。  
北総の皆さんは、今日も元気に胸張って作業に出かけていきます。一笑すれば、千山青し。  
今日も青空が広がっています。



職員室から利根川を望む景色



農耕班  
切り干し大根の作業の様子



# 笹川なずな工房

## 『続くコロナ禍での作業』

支援主任 吉田 太郎

笹川なずな工房ではこの約2

年間で販売活動が大きく変わりました。以前までは各作業班が製造した製品を店舗（施設の食堂）で日中販売し、夕方には近隣の市役所、学校、企業さんなどを職員と利用者さんがペアになり訪れて外販売を行っていました。感染症対策を最優先に今できる事として、現在は受注生産を基本に、利用者さんと職員で製造を行い、注文を頂いた各納品先へ職員がお届けする形で行っています。特別支援学校の先生方からも毎月たくさん注文が入り、お届けしています。以前であれば卒業生の元気な顔と現状報告も兼ねて販売へ伺っていました。コロナ禍の今はその活動を控え、代わりに職員が様子をお伝えし、利用者さんへも先生方の声を届けています。



丁さんは卒業して2年余りになりますが、同窓会などと先生と会える日をとっても楽しみにしている方です。特別支援学校への納品の前後では恩師の先生の事も気になり「○○先生いましたか？」と心配して聞いています。丁さんの作業での頑張りとお先生の声を双方に伝えながら、一日も早くこのような状況から解放されて自由に顔を会わせられる日が来ることを毎回納品へ伺う際に思います。

コロナ禍になっても変わらずに継続していることもあります。それは地元東庄町の磯山観光いちご園さんとの関わりです。毎年ご厚意でいちごを無償で収穫させて頂き、それを原料としていちごジャム、いちごマフィンなどの製品を施設では利用者さん

と一緒に製造。その製品は磯山さんの売店でも販売しています。4月にはいちごの収穫で農産班、加工班のメンバーが総出で収穫に伺い、今年度も1.6t収穫できました。これを冷凍保存して一年間の材料として活用しています。11月に入り磯山さんから2月に東庄町で「とうのしよう町サイクリングデー」というイベントが町観光協会主催で実施されるといふ連絡が入りました。町特産品の魅力を伝える機会でその一つに「いちご」があり、その際に新商品を出せないか？という打診を受け、職員間でも話し合い、磯山さんとも話し合いながら焼き菓子の試作を開始。計量を利用者さんと一緒に作り、普段見慣れない材料を準備していると、「新商品ですか？」と興味津々のSさん。成型では手先が器用なKさんをお願いして鉄板に並べます。試行錯誤を繰り返して、磯山さんにも試作品を何度も運びながらようやく見通しがつきました。

なずな工房では働くことを通じて地域との関わり、繋がりを

大切に活動を行い、将来的には一般就労を目指している方々もいます。コロナ禍で利用者さんが直接地域との関わりを持つことも限定されている今、私たち職員が間に入り、今は利用者さんが作った製品を通じて地域、外部との関わりを継続することを大切にしています。もうしばらく我慢の日常は続きますが、このような場面、機会を頂けることに改めて感謝し、利用者さん一人ひとりの作業での役割を大切に毎日製造に励んでいます。職員、利用者さん、磯山さんで作った「新商品」がいちごの今シーズンに2月のサイクリングイベント、磯山さんの売店で並び、お客様が手に取られることを利用者さんと楽しみにしたいと思います。



# のまる

最近また、新種のウィルスが蔓延しており、さらに気を引き締めていかなければならなくなりましたが、皆様如何お過ごしでしょうか。のまるの利用者様は皆さん毎日元気にお過ごします。

10月にのまるんるんフェスタを行いました。今年は、お化け屋敷が出し物であまりの怖さに入口より入るのを嫌がる方々もちらほら：しかし、皆様久しぶりのイベントという事もあり楽しまれていらっしゃいました。

12月には、クリスマス会を行いました。皆さん毎年この日を楽しみにされているので、終始盛り上がりを見せ、クリスマス会を楽しまれていらっしゃいました。では、その模様をご紹介します。



# ゆたか福祉苑

昨年ありがとうございました。本年もよろしくお願いいたします。年々、時の流れを早く感じます。一日一日を大切に過ごしたいものです。

さて、相変わらずコロナへの警戒と自粛が求められる中、ゆたか福祉苑では大規模な行事は控え、季節に応じたイベントを各班で行っています。今回は、秋のハロウィンの様子をご報告いたします。どの班のご利用者様の顔もキラキラ輝いていました。

次回も楽しいイベントを、職員一同作っていききたいと思っています。

ラベンダー班はメキシコのお祝いのピニャータをしました。玉を棒で叩きハロウィンをお祝いしました。



カモミール班とユーカリ班は合同でハロウィン仮装イベントです。仮装して写真撮影を楽しみました。



# けいよう

10月に新しく入職した職員を皆さんに紹介したいと思います。

## 鬼澤 陸さん



- ① 座右の銘
- ② 休日の過ごし方
- ③ 一言！

- ① 座右の銘  
「努力する人は希望を語り、怠ける人は不満を語る。」
- ② 休日の過ごし方  
ラーメンを食へに行く事。
- ③ 一言  
元気良く笑顔を忘れず頑張ります。よろしくお祈りします。

11月けいようでカフェを経営されている方を招いてお茶会を開きました。いつもと違う雰囲気、利用者さんはケーキと飲み物が運ばれてくると夢中で召し上がっていました。本当に久しぶりの行事でしたので、利用者さん方には、とても喜んで頂くことが出来ました。



# カメラリアハウス



10月24日(日)にインターナショナルフェスティバル2021というイベントがふなばしアンデルセン公園で開催されました。このイベントは、船橋市と米国・ハイワード市が姉妹都市を連携して35周年という記念事業イベントでした。以前、市役所販売をしているところを国際交流課の方が見て出店のお話を頂きました。当日まで開催できるか分からない状況でしたが天候にも恵まれ、無事に開催することが出来ました。アメリカとの国際交流ということでは日本らしい商品が良いのではないかとという話もあり、パウンドケーキはほうじ茶味を新しく作り、雑貨も巾着やお手玉、お手玉ふくろなど和風雑貨をメインで出品しました。アンデルセン公園にはたくさんの方が来ていたのですが、イベント会場にまで足を運ぶお客さんが予想よりも少なくカメラリアハウスをはじめ他の福祉事業所も残念ながら売り上げは厳しかったです…。ですが、コロナ禍になって大きな販売会は初めてだったので感染対策等の様々な課題も見え、良い機会になった販売会でした！



## Merry Christmas

### のまのまホームズ

ようやくコロナが落ち着き、今年も年末年始を楽しく迎えられそうと思った矢先のオミクロン株…。強い感染力を持っているということで、まだまだ気が抜けない日が続いています。

そんな中、のまのまホームズ「にこにこ」では、ささやかではありますが、クリスマス会を行いました。今回はその様子をご紹介します。



新型コロナウイルスの流行後は、食事の時間をずらし少人数で召し上がっていただくのが、当日は久しぶりに皆さんそろっての夕食に！

中はスタッフが手作りしたパーティーションを用い、ホーム内でできる感染対策を行いながら開催しました。クリスマスソングを流しながら、まずはシャンメリーで乾杯！皆さんそろっての食事ということも相まって大盛り上がりでした。皆



様のこの笑顔を見ることができて、私たち職員もとても嬉しく思います。

たくさんの会話が飛び交う食事は、やはり楽しいものです。今後も感染対策を行いながら楽しい時間を共有していけよう支援を続けてまいります。





# とらのこさげず

とらのこキッズでは、12月18日にクリスマス会を行ないました。その日の様子をご紹介します！

今年度初めての行事で、お子さん達も私達もドキドキワクワクでした。今年も感染症予防の為、クラスごとで行ないましたが、どのクラスもとても楽しい時間になりました♪



職員の出し物や、親子ダンス、そしてサンタクロースも会いに来てくれました!!

サンタクロースからの贈り物の時は喜んでいるお子さんや、すこしびっくりにした表情をしたお子さんもいましたが、クリスマスプレゼントを貰って笑顔でいっぱいでした。



# さざんかキッズ

まだまだコロナ禍ではありますが、さざんかキッズの秋〜冬は楽しいイベントが目白押しでした。9月はなんと！室内でお月見まんまのお月さんをバックにお餅つきをしました。10月はハロウィン🎃魔女!園長先生?からお菓子をもらってニコニコな子ども達😊 また、親子でシールラリーをしながらお散歩にも行きまし

た。11月、今年は園庭が「トトロの森」に大変身!!まっくろくろすけ探しをする子ども達の姿はとても可愛かったです😊  
そしてにじ組さんは…オリンピックにじ2021を開催!!競技用のポッチャを初体験しました。



12月はクリスマス会❤️今年もさざんかキッズに、サンタクロースとトナカイがプレゼントをたくさん積んだそりを引いてやってきました😊よいこのみんな、プレゼントは何をもらったのかな?👀



# 入所施設を転換した事例

さざんか会本部 泉一成記

入所施設を廃止・転換した北海道南部に位置する白老町（しらかほ）にある社会福祉法人白老宏友会を紹介します。

まず、白老町の位置ですが、苫小牧と登別に挟まれ太平洋を望む風光明媚で温暖な気候が魅力です。札幌千歳空港からは車にて40分で、町内には国立の「ウポポイ」というアイヌ民族資料館があります。また、虎杖浜は「たらこ」の製造で有名です。



愛泉園ホームページから

社会福祉法人白老宏友会は、昭和59年1月24日社会福祉法人として認可されました。その年の4月1日に入所施設「白老愛泉園」として定員30名（男子20名、女性10名）の入所施設をオープンしました。白老は私の生まれ故郷で、開設時の4月からその年の12月末まで勤務しました。

入所施設開設後、焼き菓子の製造販売の店「ななかまど」をJR室蘭線白老駅の近くにオープンさせるなど地域に根付いた施設経営に努力してきました。

平成2年に白老町東町に「東町ハウス」をオープンさせ、入所施設から地域移行を加速させる事業に取り組みました。

そして、平成24年3月入所更生施設を廃止し、施設を日中系事業所として多機能型事業所（生活介護35名就労B型事業10名）の事業所に転換したのです。

現在、地域生活支援センターあぷろ（定員98名）の運営やグループホーム17か所（利用者95名）サテライト3カ所利用者3名などを運営し、地域に密着した事業を運営しています。

愛泉園に勤務する田之島靖さんに転換した経緯を伺ったことがあり、「入所施設で暮らすよりも地域で自分らしく暮らせるほうがいいし、ご本人たちはいきいきしています」と目を輝かせていたことを記憶しています。

## 入所施設か地域か



北海道はどうかという、いいですが、北海道南部にある、伊達市も白老同様雪が少なく温暖な地域で、グループホームで暮らす人が多くいます。伊達市の例を参考に愛泉園も地域移行をすめたいようです。私たちは、入所か地域かという二者択一ではなく、本人が暮らしをどのように望んでいるのか、思いを聞きながら、本人の暮らしをサポートしたいと思うところです。

さざんか会でいま、のまる入所者の高齢化について今後、どのような支援が望まれるか、利用者支援のあり方について検討しています。私論としては、愛泉園の例を参考に、のまるをグループホームにして、在宅サービスが利用で

きることも選択の一つにと思いましたが、実現には様々なハードルがあります。一朝一夕にはできません。のまるで暮らすメンバーがどのような思いで生活しているのか、おひとりお一人に問いかけていと思っています。最近、高齢者施設では、居室にA-センサーを導入し夜間体調の変化をキヤッチするところも見られます。のまる利用者への高齢化への対応として検討したいと思います。

のまる入居者の高齢化について令和4年3月に理事長に提言をまとめます。その報告書の中に職員から、「かわってきた入居者さんの看取りもしたい」といった思いに私たちはどのように答えたいのでしょうか。

千葉県内では、入所施設利用者の高齢重度化に対応し居室を広くして定員を変えず、建て替えた施設の事例や愛泉園の事例などを参考に、いつまでも自分らしくしあわせな暮らしの場として落ち着いた環境と好きなことに没頭できる多様な生活環境を整えたいと考えています。